

ランチョンセミナー 4

2025年10月10日(金) 11:20~12:20

第5会場 富山国際会議場 2階 特別会議室



腰痛診療に必要な ヘルスコミュニケーション を考える

座長

松山 幸弘 先生

浜松医科大学医学部附属病院
整形外科 教授

演者

豊田 宏光 先生

大阪公立大学大学院医学研究科
整形外科学 総合医学教育学 准教授



本セミナーでは下記の日本整形外科学会 教育研修単位のいずれか1単位が取得できます。

(受講料: 1講演1,000円)

単位種別: SS [7] 脊椎・脊髄疾患

※整理券制ではありません。日整会の単位を購入された参加者から優先入場いただきます。



◀ 第33回日本腰痛学会サイト
<https://33jslsd.org/>

共催 第33回日本腰痛学会
日本臓器製薬株式会社

裏面へ
(抄録)

腰痛診療に必要な ヘルスコミュニケーションを考える

大阪公立大学大学院医学研究科 整形外科学 総合医学教育学 准教授 豊田 宏光 先生

運動療法の有効性を示すエビデンスは非常に多く存在します。喫煙や肥満が臨床成績にネガティブなインパクトをあたえるというエビデンスも多数あります。しかしながら、運動をはじめとする、いわゆる「健康による行動」は、運動器に痛みを持つ患者さんにとっては、始めるのも難しいし、続けることはもっと難しいといわれています。健康行動が難しい理由のひとつは、心と体が喧嘩するからではないでしょうか。健康的な行動は、心が「すべき」と思っても、体が「嫌がる」行動なのかもしれません。

整形外科医は薬物治療やブロック治療、外科的治療などを駆使して痛みを取り除きます。しかしながら、臨床成績の維持や健康寿命の延長には患者自身の健康的な行動が不可欠です。患者に健康的な行動をとらせる一番簡単な方法は、害に関する情報を提供し、相手に指示する、いわゆる「教える」だけのコミュニケーションです。教えるだけで行動変容できれば、医療者にとっても効率的です。ですが、そうはない場面も多々あります。人は正論を何度も繰り返し言われるとうんざりするものです。教えるだけのコミュニケーションが立ち行かなくなった場合には、どうすれば効果的に伝えられるかを考える必要があります。そのためには行動変容を促す方法やリスクの伝え方などのヘルスコミュニケーションを学ぶことが重要です。

侵襲的な手技や手術がうまくなりたいというモチベーションはあっても、外来や病棟でうまく患者を指導することに興味を持っている外科医は少ないと思います。しかしながら、患者が健康的な行動がとれるよう行動変容を促すヘルスコミュニケーションスキルは非常に役立ちます。本講演では、整形外科医にも役立つことが多い、動機づけ面接の基本と実際の手法を中心に治療につながるヘルスコミュニケーションについて一緒に考えたいと思います。